

聖書:ルカの福音書12章49~59節

説教:和解するよう努めなさい

はじめに

この世界はいま二つに分かれて分裂し、戦争しています。それを聞いて私たちは平和が来ますようにと祈られています。ところがイエスはこう言うのです。「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たかと思っていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。」耳を疑うようなことばです。このことばをどう理解したらよいのかととまどうのではないでしょう。前回、私たちは「主よ、来てください」と祈りながら、主が再び来られるのを待つ者であることを確認しましたが、分裂をもたらす方を待っていったいどんな意味があるのかということにさえなります。絶対にそんなはずはありません。ではイエスはどのような意味を込めてこのように語ったのか。ともに考えてまいります。

1 イエス

1) 平和の君

そこで基本に立ち返り、旧約聖書でイエスがどのような方であるといわれていたのか、そこから確認しておきます。代表的なものとしてクリスマスの時によく読まれる箇所ですが、イザヤ書9章6節にこうあります。「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。(中略)ひとりの男の子が私たちに与えられ、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

紀元前七百年ころ、イザヤは「平和の君と呼ばれる方がお生まれになる」と預言し、その預言のとおりイエス・キリストがマリアを通して私たちのところへ来られました。この方は「争いの君」ではなく、「分裂の君」でもない。平和をもたらすために来られた。これがまず出発点になります。

そうすると当然ですが、ではイエスはどのように「火を投げ込むために来たのだ」とか、「分裂をもたらすために来た」と言われたのか。そのことばの奥にあるものを探らなければなりません。

2) 天候を予想する

それで54, 55節を読みます。「イエスは群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言います。そしてそのとおりになります。また南風が吹くと、『暑くなるぞ』と言います。そしてそのとおりになります。」

およそ二千年前のことです。もちろん天気予報という制度はありません。その代わりに、「西に雲が出たら、まもなくにわか雨が降る」とか、「今朝から南風が吹いているから、今日は暑くなる」というような長年の生活の知恵がありました。

3) 今の時代

それに続いて56, 57節「偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知っていないながら、どうして今の時代を見分けようとしないのであるか。あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。」

人々は作物を育て家畜を飼うために、あるいは旅の安全を確保するために常に空の雲の様子を観察し、風の動きに感覚を研ぎ澄まします。もし見誤るようなことがあるなら、自分のいのちに関わることさえあります。イエスは、それと同じように、何が正しいのかを判断するために、私たちは時代を見分けなければ大変なことになると言うのです。

2 時代を見分ける

1) イエスを見る

ここで問題が出て来る。天候を予想するためには雲や風の動きを観察しなければならなかった。では、時代を見分ける時に何を観察すればよいのか。二つあります。

まず一つ目。50節。「わたしには受けるべきバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう。」

イエスは、私たちにご自分を見るようにとは言いません。その代わりに、「わたしはどれほど苦しむでしょう」と言われ、それがこの方の「受けるべきバプテスマ」であるとも言われます。これが何を指すのか、ちょっと考えればわかります。イエスが十字架におつきなり、そこで苦しむことを指す。それ以外にありません。ものの長さを測るのに定規、物差しを基準にして測る。それと同じように、何が正しくて何が誤りであるのか、基準がなければ判断のしようがありません。十字架のイエスが基準となります。

2) 家族を見る

観察対象の二つ目。基準が定まったところで次に見なければならぬのは、この世の状態です。こ

の世と言うと、世界中のいろんなところを見なければという大げさなことではない。最も身近なところを見ればよい。自分の家族です。53節。「父は息子に、息子は父に対立し、母は娘に、娘は母に対立し、姑は嫁に、嫁は姑に対立して分かれるようになります。」

悲しいことですが、このような話しは決して珍しくはありません。なかには私の家族は仲が良いから大丈夫という方もいるかもしれません。いまはそうであるなら幸いです。いつまでもというわけにはいきません。親が高齢になり介護がはじまったり、遺産の相続のことで仲が悪かった兄弟が互いに不信感をもつことさえあります。この時代がどんな時代かを見分けようとする時、家族の状態を見なさいと言っている。もしあなたの家族が争っているのなら、それは正しいことなのか。誰も正しいとは思いません。間違っている。それがまさにこの時代なのだというのがす。

3) 和解したいけれど

ではどうしたらよいのか。皆悩んでいます。

そこで最初に考えるのは、なぜ家族が対立するようになったか、その原因です。イエスが分裂をもたらすために来たと言っています。だからイエスが悪くて私たちは何も悪くはない。そう言いますか。もちろんそんなはずはない。私たちの側に原因があったのです。

私の場合、思春期になってから父親のことばと態度を赦すことができないという思いになり、それ以来父親とはうまく会話ができず、結局、互いに和解することなく父は亡くなりました。今思えば、父親なりに子どもを愛していたのに、それをうまく伝えられなかったのでしょう。また私自身も父親の弱さを理解できず、かえって父を苦しめるようなことを言ったり実際にやってきた。両方に原因があったのだと思います。おそらく私のようなケースはたくさんあるでしょう。いったいどうしたらよかったですか。

3 和解しなさい

1) 訴える人と

イエスはどうか教えているのでしょうか。58節前半。「あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときは、途中でその人と和解するように努めなさい。」

いきなり「あなたを訴える人」が出てきてとまどいます。こういうことです。もしこのまま時代を見分けられないままいたならどうなるか。言い換え

れば、正しくないことが目の前にありながらやむやにしたり、ふたをして見ないようにしているなら、どうなるか。やがてあなたはやがて訴える人と一緒に役人のところへ連れて行かれ、牢に投げ込まれる。そのようなつながりです。

でも、このようなことを言うと驚かれたかもしれません。なぜ私が牢に投げ込まなければならないのか。私は人に後ろ指を指されるような悪いことはしていない、と思うでしょう、と言いたくなるでしょう。しかし残念ながらそうはいかない。空の雲の様子を見てこれから雨が降るとわかるように、間違った状態に気がつきながら、あなたがそのままにいるなら、必ずさばかれることになる。なぜさばかれるのか。そもそも人と人とが対立し、争ってしまうのは、私たちの罪に原因がある。罪はそのままにはされません。罪を訴える人がいるのです。もしこのまま訴える人と和解しなければ、さばきにあつて牢に投げ込まれてしまう。そうならないためにどうしたらよいのか。訴える人と和解するしかない。

いったい、訴える人とはだれか。神です。神は正しい方ですから、罪を見ごしになることはできません。必ずさばかなければならない。その神とどのように和解したらいいのでしょうか。なにか差し出せばよいのか。いいえ、私たちの持っているものでは罪を償うことはできません。ではどうするのか。

2) さばきときよめの火

神と和解できない私たちに代わり、神のひとり子であるイエス・キリストが、和解の務めをしてください。どこに書いてあるか。49節です。「わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。」

この「火」ということば、これには二つの意味が込められています。一つは、さばきの火です。もう一つはまったく正反対に見えるようですが罪のきよめを意味します。火で精錬するという言い方が聖書に出て来ます。

では、地上に投げ込まれた火のさばきは誰が受けたのか。私たちですか。いいえ。主イエス・キリストが受けられました。私たちが訴えている人と和解できるように、この方が身代わりになって牢に投げ込まれたのです。「和解するよう努めなさい。」努力しなさいではない。すでに和解への道は十字架のことに出来上がっている。私たちがこの方を信じる時、私たちの罪がきよめられる。そうやって訴える者と和解できるようになっているのです。

3) 御国を求める

最後に確認します。神と和解できると、すべての問題が即座に解決するのでしょうか。そうであったならばと思いますが、残念ながらそうはいかない。完全な解決をいただくまで、しばらく待たなければなりません。それは間もなくかも知れないし、もしかしたら主が再び来られる日を待たなければならぬかもしれない。がっかりするのでしょうか。しかし、イエスは12章31節でこう言っていました。「むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。」

壊れかけた家族を見たら、悲しくて前に進む気持ちは起きないでしょう。もうだめ、望みはない、誰もがそう思う。ところが私たちには望みがあります。人生お先真っ暗とよく言いますが、人生というのは真っ暗闇のトンネルを通っているのによく似ています。長いトンネルですから普通は出口は見えないはずですが、そこが私たちが通っているトンネルはそうではない。出口は遠いかもしれませんが、光がちゃんと見えるのです。光が見えるのですから出口は確かにあるとわかる。そこを目指して歩いて行く。

光がどこにも見えないようなひどい時代に私たちは生きています。しかし光はあります。私たちは天の御国という出口に向かって、主が来られるのを待ち望みながら歩んでまいります。